姫の気まぐれ

水銀。杏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
姫の気まぐれ

【Ｎコード】
Ｎ２４８８Ｚ

【作者名】
水銀。杏

【あらすじ】
天皇の娘の暗殺を命じられた執事。だが殺せない。理由はただ一つ。（過去に連載して消した作品のリメイクです）

プロローグ（前書き）

あらすじにも書いたように、これはリメイクしたものです。
詳しくは後書きに書きますので、『プロローグ』をどうぞ！

プロローグ

俺の前に出されたのは、一人の少女の写真。
作り笑いのような表情で、人をバカにしているようだ。
「知ってるよな？天皇の一人娘だ」
ボスは小型の拳銃と、弾が３つを俺にくれた。

「これで、この娘を殺してこい」

それが俺の命令。
暗殺でも、近づいて殺してもいい。
日本国民はこの娘にうんざりしていた。
１５歳になるのに、まともな躾はされておらず、
国宝を拝見するときにも常に騒いだり、暴言を吐いたり、
顔とのギャップが激しい生意気な小娘だった。
天皇も天皇で、注意することなく笑っており、後に謝罪することもない。
かといって、この娘が死んだところで日本が変化するわけでもないのは確か。
この出来事で、天皇一族が崩壊すればいいのだ。
俺はボスに拾われた身。命令は必ず実行する。

「もし接近するなら、コイツに頼め」
メモ用紙に携帯番号。
現在天皇のとこで護衛をやってる仲間だ。
数回会ったことがあるか、助けになるかもしれない。
俺は娘に近づきことにした。
銃で撃つなど、バレるようなことはしたくない。
寝ているとこを狙ってやろう。その方が楽な気がする。

「もしもし…ボスから頼まれたんだが――――」

数日後

俺は上手く接近することが出来た。それは、

「今日からお嬢様の執事を務めさせてもらいます。…モカと申します」

執事。性に合わないと思ったが、天皇が勝手に抜擢した。

黒いスーツを着て、この娘の世話をすることになった俺。モカは適当に決めた名だ。

「変わった名前ね。…私は、澪(みお)よ。

“姫”って呼んでちょうだい」

「…かしこまりました。姫」

これが、俺と姫との出会いだった。

プロローグ（後書き）

次話⇒１１日（２１時）
誤字・感想等受け付けます。

１話目は明日ですが、それ以降は3日おきぐらいになると思います。
Ｒ１５ということで、２１時投稿で行きます。

1・私を敬いなさい（前書き）

一話目スタートです。
あ、完璧に女性向けの作品です。

1・私を敬いなさい

１５歳の姫
２１歳の執事
部屋でずっと二人っきり

「モカ、お腹が空いたから何か持ってきて」
「はい」
基本的にベッドの上で過ごす姫。
学校に行く時間なのに、服に着替えようともしない。
ピンクのフリルのネグリジェが可愛らしいが、数日間も見てるといい加減飽きる。
よそから見たら、美形なお嬢様だが…。
「サンドイッチです」
「置いといてー」
俺を見ようともしない。近くにあるテーブルを指差し、読書を始めた。
テーブルにサンドイッチを置き、その側で立つ。
執事の仕事は面倒だが、休憩が多いバイトみたいな感じだ。
食事や掃除の時間以外は、こうして立ってるだけでいい。
姫からの命令があるまでは。
「父上様がおっしゃってましたよ。学校に行かないのかと…」
「モカは私だけの執事でしょ？私の言うことだけ聞けばいいの」
突然俺に話しかけられた衝動で、サンドイッチを頬張る。

「モカが来る前に、年配の執事がきたわ」
食後の紅茶を飲みながら、姫は続けた。
「身の回りのことは言わなくても全部してくれたわ。
でも、ものすごくしつこかった。家の財産とか聞いてきて…」

「…」
「知らないって言っても聞いてきたの。だから辞めさせたわ」
「そんなことが…」
カップが空になると、紅茶を注ぐ。
「モカも聞いてきたら、…」
「姫が嫌がることは聞きませんよ」
「…そう」
紅茶を一口飲むと、姫が俺にアイコンタクトをする。
もういらないっていう合図だ。
トレイごと部屋から出す。再び部屋に戻ると、
姫はまたベッドの上で横になっていた。

「なんで執事になったの？金目当て？」
「…私は金で雇われたわけではありません。
ただ姫の守るために…」
「悪趣味」
「なんとでも」
笑いながら姫が俺に枕を投げる。
それを受け取ると、元の位置に戻す。
自動的に、姫の顔が俺に近づく。
「もし立場が逆だったら、襲ってたわよ？」
「そうですね」
お互い口だけ笑うと、唇を重ねる。
別に恋仲になったわけじゃない。
姫は気にいった人にキスをするらしい。
まぁ、俺が初めてみたいだが。

すぐ殺せる。
いつでも殺せる。
俺の頭の中では、それを抑えるので精一杯だった。

１・私を敬いなさい（後書き）

次話⇒１４日（２１時）
誤字・感想等受け付けます。

2・私の言うことだけでいいの（前書き）

どうぞ！

2・私の言うことだけでいいの

「モカ君、澪に学校に行くように言ってくれないか？」
「最善を尽くしておりますが…」
「せめて勉強はしてくれればいい。…では、頼むぞ」
「いってらっしゃいませ」
姫のお父様である、天皇陛下。
今日から一週間、アメリカの皇太子への挨拶、王室の訪問をするらしい。
見送ると、誰かに呼ばれてるような気がした。

「遅い！」
「申し訳ありません」
俺の勘は当たっていた。
ベッドの上で横になりながら足をバタつかせ、俺の事を睨みつける。
「お父さん、なんか言ってた？」
「…学校には行きたくないですよね？」
「うん」
即答で返す姫。
用意しておいた朝食はもう食べ終わっていて、特にやることがないのか、
ネグリジェのままで起き上がろうとしない。
机に置いてある教科書も、読むどころか見ることなく…。
陛下が困るのも分かるが、甘やかしたのはそっちだと思うんだが。
「モカは私の執事だから、お父さんと話す必要ないわ。
この部屋から出なくてもいいし」
「縛られるのは嫌いですよ？」
「…私の執事になる条件よ？」
俺が姫が寝ている横に座ると、少しだけ嬉しそうな顔をした。

「なんで学校が嫌なんですか？友達がいるでしょう？」
「友達はいない。周りに男子が寄ってきて気持ち悪いの」
姫が通っている学校は、大手会社の跡継ぎや令嬢などの集まりだ。
もちろんのこと、姫と結ばれた男子は天皇一族の仲間入り。
自然と注目の的になるのは仕方ないことだが。
「無礼な奴は懲らしめないとですね」
「モカが同級生だったらいいのになー」

「モカは勉強できるの？」
「ある程度のことしか…」
モカは捨て子であり、まともに義務教育を受けていない。
人殺しの世界に入った時に少しだけ勉強したぐらいだ。
「一緒に勉強する？」
「したら、学校に行ってくれます？」
「それとは別。私が何もしなかったら、モカの評価が下がるでしょ？
学校は、モカも行ってくれるなら行くわ」
姫の腕を引っ張り、体を起させる。
俺が触れると、姫は何故か素直に言うことを聞いてくれる姫。
自然と俺の胸元に姫の顔を当たる。
「モカのココは温かいから好き」
「はい」
「一週間勉強してやりましょ？お父さんを見返すの」
「はい」
俺は姫の頭を撫で、見えないように面倒臭そうな顔をした。

2・私の言うことだけでいいの（後書き）

次話⇒１６日（２１時）
誤字・感想等受け付けます。

３・私はあなたが嫌い（前書き）

そろそろ１５禁の内容を出せたらいいのになー

3・私はあなたが嫌い

「勝手に部屋に入らないでよ！」
「ですが澪様、陛下に頼まれてまして…」
掃除をしようと部屋に入ってきたメイドを怒る姫。
「掃除ぐらいモカがやってくれるわ！どっか行って！」

はぁ…

「澪様！何をするんですか！？」
バイオリンのレッスン中、いきなり弓を床に叩きつける姫。
「つまらないの！もうやらない！」
「陛下が…」
「バイオリンも華道も茶道も、モカが一緒にやってくれないなら、私やらない！」

いやいやいや

「なんで一緒に洗濯するのよ！？別にしてって言ったでしょ？」
「申し訳ありません！私のミスです…」
陛下の服と一緒に自分の服も洗濯され、お怒りの姫。
「あんたみたいなバカメイドじゃなくて、モカがっ」
「分かりましたから姫、部屋に戻りましょう」
これ以上メイドたちが怒られるのを見てられない俺は、姫を背負い、部屋に戻す。
基本姫が家の中を移動するときは、俺がおんぶする感じになっている。
「すみません、モカさん」
「いえ、他の業務をよろしくお願いします」

部屋に着くと、ベッドに飛び込む姫。
「さて、勉強しましょうか？」
「モカも一緒？」
「先に洗濯を済ませてきますね」
「帰ってくるまでやらないわよ？」
「…結構です」
部屋を出ると、一気に疲れが出た。
今、陛下はアメリカに行っているが、姫を心配する電話が頻繁に掛かってくる。
何をしているんだ？とか、勉強はちゃんとしているのか？とか…。
過保護というか、全てをメイドや俺にまかせないでほしい。
自分の娘ぐらい、自分で面倒を見たらどうなんだ？

部屋に戻り、姫の命令で勉強を付き合うことに。
「モカ、この問題にはこの数式を使うのよ」
「姫は頭が冴えてますね」
「当り前よ」
俺がいるだけで、姫の勉強がはかどる。
この数日で、学校から出された宿題が終わりそうだった。
「姫、この調子で終わらせましょう」
「…なんかご褒美くれる？」
「？」
「覚悟しといてね」
姫は俺に笑いかけると、宿題を続けた。

３・私はあなたが嫌い（後書き）

次話⇒１８日（２１時）
誤字・感想等受け付けます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2488z/

姫の気まぐれ

2011年12月16日21時52分発行